

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「つまらない」と言われたあの日から 理想の授業への挑戦が始まった

茨城県立古河第三高校

藤田一輝先生

36歳

私が乗り越えてきたもの

「先生の授業はつまらない」



ふじた・かずき ◎教職歴14年。同校に赴任して6年目。担当教科は化学。3学年担任。
茨城県立古河第三高校 ◎全日制／普通科／共学
09年度入試では国公立大は、一橋大、筑波大、横浜国立大、茨城大、宇都宮大、埼玉大などに47人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、GMARCH（*）など延べ358人が合格。

「教師の言葉に素直に従うのが生徒だ」。化学の教師になった頃の私は、生徒と教師の関係をこのように考えていました。その背景にあったのは自分の中学、高校時代の経験です。特に、中学校の理科の先生は、50分間の授業をあとという間に感じさせる程の授業力の持ち主で、「楽しみながら学力が身に付く授業がしたい」と、私に教師の道を示してくれた存在でした。

ところが、現実には厳しいものでした。生徒は年齢の近い私に気軽に声をかけてきました。しかし、油断からいつの間にか友だち感覚に陥り、毅然とした態度で指導に臨めなくなってしまいました。授業も、「どうもうまくいっていない」と感じていました。教職2年目、自主的に実施した無記名アンケートで、「先生の授業はつまらない」とはつきりと書かれた文字を目にした時は、「私が教えなければ、この子は化学を好きになったかもしれないのに」と申し訳ない気持ちになりました。

の受け持つクラスはいつも下位でしたから、何かを変えなければならぬのは明らかでした。

アンケートには「話の間が長すぎる」「板書が読みにくい」など、いくつかが指摘がありました。翌年度の授業では、それらを意識して改めていきました。

4、5年目から、授業の雰囲気も変わっていきました。説明↓板書↓視写を繰り返すだけだった授業の中に、次第に生徒との言葉のキャッチボールが生まれてきたのです。成績でも、ほかの教師が担当するクラスとの差はほとんどなくなりました。「これで良くなる」という方法論があったわけではなく、生徒や先輩教師の指摘を受け、少しずつ授業改善を積み重ねた結果でした。

改善の積み重ねで授業が変わる

生徒に授業アンケートを実施したのは、とにかく改善のヒントが欲しかったからです。定期テストの平均点も私が教えなければ、化学が好きになれたはず……

*GMARCHは学習院大 (G)、明治大 (M)、青山学院大 (A)、立教大 (R)、中央大 (C)、法政大 (H) を示す

*プロフィールは取材時 (2010年2月) のものです

そして、これからも挑み続ける目標

実験の時間を増やしたい

30歳になる頃には、信頼関係がなければ、教師の言葉は生徒に届かないことが身に染みて分かっていました。そして、「教師が本当に自分のことを考えてくれているか」を生徒は見抜く力を持っている。そんな生徒が40人も見つめる前で授業をするのは大変なことだ。そんな覚悟も出てきました。

生徒と授業の怖さを知る一方で、もっと授業を良くしたいという思いが強まりました。例えば、覚えることの多い授業で、いかに生徒の集中力を持続させるか。10年次研修で学んだ授業法を参考に、講義だけにならないように、

生徒の様子を見ながらオリジナルプリントを配付したりしています。

しかし一番のテーマは、「もっと実験を増やしたい」ということです。私の理料の面白さを教えてくれた中学校の恩師は、毎回の授業を実験から始めていました。中学校と高校の違いはあっても、まだまだ実験を増やせるはず。本来、理論学習と実験は車の両輪のような関係なのですから。

生徒実験は年に10回くらい。演示実験はもっと行っていますが、まだまだ増やしたいです。ただ、実験を行うためには準備にその何倍もの時間が必要。さまざまな校務を任せられるようになった今、その時間をどうすれば確

保出来るのか……。恩師は朝6時には登校し、毎晩11時まで職員室にいました。生活のすべてが生徒のため、そんな人でした。ただ、私は子どもや妻との時間も大切にしたい。しかしそれは教師として逃げではないのか……。ことあるごとに自問しています。

心から納得できる授業を目指して

30代後半になり、「生徒とはこういうものだ」といった先入観がなくなっただよりに思います。目の前の生徒をじっくり観察し、どんな授業が必要かを柔軟に考えるようになりました。

これから力を入れていきたいことは、上位層を伸ばすことで集団全体を引き上げるような指導です。そこに実

験を上手に、そしてもっとたくさん組み込みたい。入試でも実験を扱った問題が増えていますから。

「生徒が笑顔で生き生きとして、十分に理解が出来たようだ」と心から納得出来る授業は、年間約6000回の授業のうち、正直、今は10回足らずです。恩師なら、きっと5割はいくはずですから、大きな差を感じています。でも、教師を続ける以上、私も同じレベルを目指したい。毎日の限られた時間で今後何が出来なのか暗中模索ですが、もっと挑戦しなければと思います。

確かに、授業は20代の頃よりも出来るようになりました。しかし、20代の必死さはこの先も忘れてはならない。そう、自分を奮い立たせています。

葛藤はある。しかし、挑戦し続ける覚悟もある

藤田先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒実験、演示実験はそれぞれどのような位置付けで行っていますか？ 取り組む際に留意していることはありますか？

A 演示実験は単元の最初に行うことが多いです。「教科書の○ページの実験である」と解説すると、生徒の興味が半減してしまうので、実験の内容が生徒の実生活とどのように結び付いているかだけを説明し、単元に対する関心を高めています。生徒実験は単元の終了時に行うことが多いです。知識がないまま実験を行うと危険ですし、授業を受けた後の方が理解が深まるように思うからです。

Q 実験で体験したことを、教科書の内容など理論の学習とスムーズに結び付けていくために、工夫していることはありますか？

A 以前、県の指導主事から教えていただいたことで、既に実践されている先生も多いと思いますが、実験のプリントの裏にそれに関連した入試問題を載せておくようにしています。実験のプリントには考察や感想を書く欄がありますが、生徒によっては早く終わってしまい時間を持て余しています。入試問題を載せておくと、そうした生徒も集中力を途切れさせることなく取り組むことが出来ます。また、3年生の課外の時間に、入試問題で扱われた実験を実際に行ってみたこともあります。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す藤田一輝先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、藤田先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp